

## 全国在宅療養支援診療所連絡会 第1回全国大会 プログラム別詳細

タイトル	かかりつけ医の在宅医療
日時	平成26年3月23日(日) 9:30~12:00
会場	サブホール(503)
座長	和田忠志 (いらはら診療所・連絡会研修教育局長) 英裕雄 (新宿ヒロクリニック・連絡会世話人)
演者	英裕雄 (新宿ヒロクリニック・連絡会世話人) 前原操 (栃木県医師会・連絡会会員) 鈴木央 (鈴木内科医院・連絡会副会長)
企画の趣旨・概要	<p>日本医師会は、昨年7月28日に在宅医療に関する研修会を企画し、全国在宅療養支援診療所連絡会と協働して、「かかりつけ医の在宅医療 超高齢社会—私たちのミッション」という教育用DVDおよび冊子を刊行した。本セミナーは、この「かかりつけ医の在宅医療」を中心に据え、「在宅医療に取り組んでみたいと考える医師」に対しての研修会として企画されたものである。</p> <p>かかりつけ医は、在宅医療への参入を期待されている。親身になって診療を行なう「かかりつけ医」は、5年後、10年後には、必ずや次のような相談に遭遇するであろう。例えば、息子が来院し、「先生、うちの母ですが、足腰が立たなくなり通院が困難になりましたが、『ずっと先生に診てもらいたい、他の先生はいやだ』と言ってききません。お暇なときでいいですので往診で診て頂けないでしょうか」という相談を受けるような例である。このように真剣に務めた「かかりつけ医」は、必然的に在宅医療に参入する機会を経験する。これは、信頼を得た患者に対する診療を自宅(居宅)で継続する行為が求められていることに他ならない。</p> <p>在宅医療の重要な目的の一つが、「自宅(居宅)で最期まで療養したい」という患者の希望を実現することである。一見矛盾するようだが、「自宅(居宅)での看取り」は目的でもあるが、「目的というよりは結果」である。つまり、かかりつけ医が、信頼する患者に依頼されて、最期まで診療する行為が「看取り」だからである。患者は自分が信頼する医師に「最期の脈を取ってほしい」と願うことであろう。患者と医師の信頼関係の最終ステージで、医師が患者に「最期の脈を取ってほしい」と依頼されることは、医師として、最も光栄なことのひとつである。その意味で、「看取り」は、患者と医師との信頼蓄積の「結果」であり、かかりつけ医に託された、重要な、そして光栄な仕事であるといえよう。</p> <p>本研修会では、まず、「かかりつけ医の在宅医療 超高齢社会—私たちのミッション」を上映する。次に、在宅医療実践の基本的知識、訪問看護ステーションとの連携、看取りに至る道程の支援という、最も根本的な在宅医療実践の要素を、深くかつ広い経験をお持ちの3人にお話し頂くという構成である。</p> <p>多くの方々のご参加をお待ちしている。</p>

(敬称略)